

受験 番号						氏 名	
----------	--	--	--	--	--	--------	--

# 国 語

( 100 点 )  
( 50 分 )

## 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は 15 頁ある。試験開始後、頁の落丁・乱丁及び印刷不鮮明、また解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
3. 監督者の指示にしたがって、解答用紙の該当欄に以下の項目をそれぞれ正しく記入し、マークせよ。

(1) 受験番号欄

受験番号を 5 ケタで記入し、さらにその下のマーク欄に該当する 5 ケタをマークせよ。(例) 受験番号 20025 番 → 

2	0	0	2	5
---	---	---	---	---

 と記入。

(2) 氏名欄 氏名・フリガナを記入せよ。

4. マークシートについて


- (1) 受験番号が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- (2) 解答は、解答用紙の注意事項をよく読み解答欄に H B 鉛筆で正確にマークせよ。  
例えば 

20
----

 と表示された問題の正答として④を選んだ場合は、次の(例)のように解答番号 20 の解答欄の④を濃く完全にマークせよ。薄いもの、あるいは不完全なものは解答したことはない。

(例)

解答 番号	解 答 欄
20	① ② ③ ● ⑤

- (3) 解答を修正する場合は必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色や消しくずが残ったり、 のような消し方などをした場合は、修正したことにならない。
5. 試験終了後、問題冊子および解答用紙を机上に置き、試験監督者の指示に従い退場しなさい。



第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点50)

建築とは、通常、屋根や外壁によって自然から切りとられた内部の空間を含む実体のことである。そこで、大きな彫刻や送電線の鉄塔のように内部空間のないものは、たとえ建築的な規模のものであっても建築とは言いがたい。内部空間は、内部であることによって人間を自然のキョウイ<sup>(7)</sup>や外敵の侵入から庇護し、目的や機能のある生活の場を提供するものである。スペインの南部グラナダの東六〇キロのグワディックスやプルレナに行ってみると、丘の斜面に洞窟が掘ってあり、現在でも人々が住んでいる。その内部は通常の石造建築の内部と異なることはないけれど、入口の扉のある白い壁面や空気抜き煙突以外は建築としての外観を伴わない点が一般の建築と趣きを異にしている。しかし内部空間をもっている点から考えれば、この洞窟住居も建築である条件を満たしているということができよう。

さて、きわめて常識的にいうと、建築空間は、床、壁、天井によって実体的に限定される。よって、床、壁、天井を建築空間を限定する三要素と考えることができる。内部空間は、この床、壁、天井のような具体的な境界によって外部である自然から切りとられ、建築空間を形成するのである。内と外というような空間秩序を形成してゆく上には、どうしても際立った境界線を必要とする。建築はそれととりまく「外部」とは対照的に「内部」として体験されるものであって、当然、ある限定された大きさを有するものである。無限の大きさの建築というものがありえないということは建築の本質に **a** の存在があるからである。言いかえれば、建築とは境界をつくって「内部」と「外部」とを区別する技術であり、境界から内に向かって求心的に空間を秩序だてる方法である。従って、この境界の在りかたは建築空間にとってきわめて重要なものであり、境界の内側の「内部」には平穏で **b** のある空間がつけられるのである。

外から家に帰ってくるとき、玄関でなんの疑いもなく靴をぬぐ。われわれ日本人にとっては靴をはいている空間は「外部」であり、靴をぬいでいる空間は「内部」であるということが永年の生活の習慣として身についていると言える。そして靴をはいて外にいるときは、ある種の緊張感があり、靴をぬいでやっと解放され、やれやれ家に帰ったという実感をもつのが、おおかたの

日本人の偽らざる心情であると考えられる。

わが国の最近の都市住宅の中には、すっかり西欧化して、リビング・ルームはゆったりとし、家具、じゅうたん、カーテン等もうまく調和し、化粧室や台所は明るく近代的であり、まるでニュー・ヨークか北欧のアパートにでもいるのではないかと錯覚をおこさせるほど西欧的な住いもある。このような国際的水準から見て質的になら遜色のないわが国の住いでも、西欧の住いとは本質的で重要な違いが一つある。それは、西欧の住いには都市や街のような公共的な外部の秩序の一部であるという基本的な考えがあるのに対し、わが国では住いは家庭というシ<sup>(4)</sup>テキな内部の秩序であるという考えが基本的であり、その結果、西欧の家の中では外にいる時と同じように靴をはいているのに、わが国では家の中では靴をぬいでいるということである。

靴をはいているのかいないのかという、たったそれだけのことが、それほど本質的で重要な違いであるのかという反論もあるであろう。<sup>A</sup>建築の空間を領域的に考察する場合には、このことは見逃がすことができないほどに重要な問題なのである。

通常、建築を考える場合、「内部」と「外部」との境界線を一軒の建築の外壁に想定し、屋根のある建物の内側を「内部」、屋根のない建物の外側を「外部」と見なしている。しかしながら、最近の建築では一軒の建物の規模が巨大となり、かつ、複合化されて、都市的規模の「群の建築」を形成するようになってきたため、「内部」と「外部」とを簡単に規定できない場合もないとは言えない。例えば、複合的的巨大建築では、「都市の廊下」などに見られる「内部のような外部」ができたり、建築の内部に沢山の樹木を植えて「外部のような内部」ができたりしていることがある。

しかしながら、この「内部」と「外部」の設定には、西欧人とわれわれ日本人との間に意識の上でどうしても差異があると考えないわけにはいかない事実がある。このことをつとに指摘したのは和辻哲郎で、名著『風土』の中で次のように述べている。

最も日常的な現象として、日本人は「家」を「うち」としてハソク<sup>(7)</sup>している。家の外の世間が「そと」である。そうしてその「うち」においては個人の区別は消滅する。妻にとつては夫は「うち」「うちの人」「宅」であり、夫にとつては妻は「家内」である。家族もまた「うちの者」であつて、外の者との区別は顕著であるが内部の区別は無視せられる。すなわち「う

ち」としてはまさに「距<sup>な</sup>てなき間柄」としての家族の全体性がハソクせられ、それが「そと」なる世間と距てられるのである。このような「うち」と「そと」の区別は、ヨーロッパの言語には見いだすことができない。室の内外、家の内外を言うことはあっても、家族の間柄<sup>まがら</sup>の内外を言うことはない。日本語のち・そとに対応するほど重大な意味を持つのは、第一に個人<sup>個人</sup>の心の内と外であり、第二に家屋の内外であり、第三に国あるいは町の内外である。すなわち精神と肉体、人生と自然、及び大きい人間の共同態の対立が主として注意せられるのであって、家族の間柄を標準とする見方はそこには存せぬ。かくてち・そとの用法は日本<sup>B</sup>の人間の存在の仕方の直接の理解を表現しているといつてよい。

われわれ日本人の「うち」は家であり、家の外の世間は「そと」であるということ<sup>A</sup>を建築の空間領域的に見直すと、靴をぬいでくつろいでいる空間は「うち」であり、靴をはいている空間は「そと」であるということができよう。

そこで、一つの卑近な例をあげてみよう。いわゆる西洋式ホテルと、温泉観光ホテルのように旅館から出発したホテルとの違いは、一体どこにあるのであろうかということを検討してみたい。両者とも外観を見れば堂々たる鉄筋コンクリート造の近代建築であるが、内部に繰り広げられる空間の秩序はまったく異なっているのである。それは「内部」と「外部」との境界の置きかたによるのである。旅館から出発したホテルは、まず第一に玄関で靴を脱ぐ。通常、われわれ日本人にとっては靴をぬいだ所から「内部空間」にはいると考えられるから、玄関ロビーも廊下もエレベーターもすべて「内部」であり、ゆかたに丹前で自由に闊歩<sup>かつぽ</sup>できる空間であり、むしろ背広にネクタイの正装でいる方が場違いであるような感じすらするのである。そして通常、旅館式ホテルの玄関は夜は鍵を締めるかわりに個室には鍵をかけない。入浴のような個人的でシテキな行動も海や山の見える景勝の大浴室で多数の人が一緒に行く。日本人にとって、旅館は「家」の拡大された「内部」の空間であり、ここに偶然泊り合わせた人々は家族の一員であるようにふるまうのが喜ばれるのである。

それに対して、いわゆる西洋式のホテルではどうか。通常、ホテルの玄関は二十四時間開放されていて、靴をはいたまま自由にロビーや廊下を歩くことができる。これらの空間は日本式のホテルの空間とは異なつて、街路のような外的秩序の延

長であり、また、公的な空間でもある。であるから、これらの場所でもたまたま泊り合わせた人々と馴れ馴れしくしたり、ゆかた、パジャマ、ステテコだけで闊歩することは、ここを「外部」と考えている人々にとってはいかにも不都合である。西洋風のホテルでは個室はきちんとした壁や頑丈な扉によって区別され、その扉にはセイコウな鍵(x)が取り付けられている。この個室ではじめて「内部」に入ったと考えられるから、靴をぬぐことも、ゆかた、ステテコ姿になることもまったく自由である。その代り、個室を出るときは、わが国で家の玄関を靴をはいて出ると同じ意味をもつ。靴をはいて個室を出れば、家庭内の食堂であろうとホテルの食堂であろうと街のレストランであろうと同じく「外部」である。西欧の伝統としての「内部」「外部」の意識にはこのような考えがあると思われる。

さて、靴をはいたまま暮らす西欧的雰囲気とは、独立した個の対立による外的秩序の空間であり、靴をぬいで暮らす日本的雰囲気とは、わけへだてのない個の集合による内的秩序の空間であるということができよう。ここで外的秩序は内的秩序に必ずしも優れているとも考えられない。内的秩序には外的秩序にない親密感や安心感があり、住む人々に仲間意識やくつろぎを与えてくれる。しかしながら空間領域には意識の上で内外の別があり、どこにこの境界線をおくのかということを強く意識する必要があると考えられるのである。たとえば、列車の寝台車やホテルの廊下を外的秩序と思っている人々と、同じ場所を内的秩序だと思っている人々とは同席すると、服装、態度、話し方等が不調和で、お互いに不愉快な思いをすることがあるからである。

わが国では伝統的に、家の内部に整然たる秩序をととのえ、家族を中心に一軒ごとに内的秩序を保ってきた。内部に秩序をもつということは、別な見方をすると建築の外部には無関心であることを意味し、都市空間の充実という構想(x)はキハクであった。それに対し、西欧諸国では、イタリアの広場などに見られるように建築の外部にも美しい模様の舗装が古くから発達し、また家の中まで靴のまま入るといふ習慣が生れてきた。この西欧の生活の中には外的秩序の考え方があり、日本の住いの中で行われるようなことが外で行われる。教会で祈り、公園で休み、レストランで食事をし、広場で談笑するということになるのである。

(芦原義信「街並みの美学」一部改)

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1  
5

(ア)

キヨウイ

1

- ⑤ 自由をキヨウジユする  
 ④ 合格してキヨウキ乱舞する  
 ③ 私の父はハ克蘭キヨウキだ  
 ② 犯人からのキヨウハク状が届く  
 ① キヨウカツを繰り返し逮捕される

(イ)

シテキ

2

- ⑤ シエンをぶつける  
 ④ 歌舞伎界のシホウ  
 ③ シジョウあふれる田園風景  
 ② 行政のシサク  
 ① ショクシが動かない

(ウ)

ハソク

3

- ⑤ 事件のハモンが広がる  
 ④ ハキに満ちている  
 ③ ハカイの罪におののく  
 ② 米国に大使をハケンする  
 ① 権力をハジする

(エ)

セイコウ

4

- ⑤ コウゲンレイシヨクすくなし仁  
 ④ コウセキを讃える  
 ③ コウケンあらたかなお寺  
 ② 期待と不安がコウサクする  
 ① ヘンコウした教育

(オ)

キハク

5

- ⑤ キウンが熟する  
 ④ キフクの激しい山道  
 ③ キシヨウ価値のある品  
 ② 穀物の価格がトウキする  
 ① 経済不況をキカとして出店する

問2 空欄 **a** に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **6**。

- ① 秩序
- ② 技術
- ③ 外部
- ④ 内部
- ⑤ 境界

問3 空欄 **b** に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **7**。

- ① 近代性
- ② 庇護性
- ③ 機能性
- ④ 無限性
- ⑤ 公共性

問4 傍線部A「建築の空間を領域的に考察する」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **8**。

- ① ある建築空間が境界線の内部と位置づけられるのか、境界線の外部と位置づけられるのか、について考察すること。
- ② ある建築空間が西欧的価値観にもとづいて秩序づけられているのか、日本的価値観にもとづいて秩序づけられているのか、について考察すること。
- ③ ある建築空間が靴をはくべき空間であるのか、はく必要のない空間なのか、について考察すること。
- ④ ある建築空間が内部の秩序の一部であるのか、外部の秩序の一部であるのか、について考察すること。
- ⑤ ある建築空間が一定の目的や機能を提供するためのものであるのか、そうではないのか、について考察すること。



問5 傍線部B「日本の人間の存在の仕方の直接の理解」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 精神と肉体、人生と自然、及び大きい人間の共同態の対立に配慮することなく人間の存在を考慮することができるという理解。
- ② 家の内外を表す際に用いる「うち」「そと」を家族の間柄の内外でも用いることから明らかに家族の間柄の内外を標準として人間を区別するという理解。
- ③ どんな場所においても、つねに変わることなく、夫は「うちの人」であり、妻は「家内」であるという理解。
- ④ 「うち」において個人の区別が消滅するが、「そと」においては「距てなき間柄」として全体性をハソクし、個人の区別は消滅しないという理解。
- ⑤ 「うち」においては個人の区別は存在しないが、「そと」においては家族であっても個人として区別するという理解。

問6 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

- ① わが国においては、家族の間柄の内外を「うち」「そと」と区別しているが、個人の心の内外を表現するのに、「うち」「そと」を使うことはない。
- ② 西欧では、伝統的に、個室を出れば、靴をはいたまま自由に歩くことができるか否かにかかわらず、家庭内の食堂も街のレストランもホテルの玄関も浴室も外部の秩序の一部と考えられている。
- ③ 筆者は、わが国で都市空間の充実が意識されないのは、室内で靴をはかないからであると考えている。
- ④ グワディックスやプルレナの洞窟住居は、建築としての外観を伴っていないが、送電線や鉄塔のように内部空間を有しているため、通常の石造建築と同様に、建築と言ってよい。
- ⑤ 西欧における内外の区別を考える際に重要なのは、主に、精神と肉体、人生と自然、及び大きい人間の共同態の対立である。

## 第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点50)

「鉄ちゃん」。その不思議な言葉と出会ったのは六年前の冬のこと。吉祥寺駅南口の喫茶店で、ドイツ文学の専門家二人と学務がらみの会合を持ったのだが、いつしか三人の話題は鉄道へと収斂していったのである。なぜ話題が線路関係、列車方面へと向かったのかは思い出せないが、気がついてみると当時のわが同僚、トーマス・マンを研究する若手ドイツ文学者が、残る二人に向かつて鉄道趣味の奥行き深さを滔々とコウギし始めていた。電車には毎日乗っているものの電車自体について興味を抱いたことのなかった僕は、なぜ酔狂にもそんな **a** な趣味に入れ込む人間がいたものかといぶかしく思いつつ、同時にまた、トーマス・マン研究者はなぜゆえそうした異界に通じているのかと、にわかには疑念が兆したのである。やがて彼の口から語られていったのは、自分が幼少時からどんなに鉄道を愛し、追いかけて続けたかという、半生に及ぶ情熱の告白だった。

時刻表研究、路線研究や模型作りから始めて、写真撮影、録音、さらには路線の乗りつぶしにいたる一見なんとも地味な、しかしソウダイといえども実にソウダイな趣味の世界がそこには広がっているようで、若きドイツ文学者の話に耳を傾けながら、そういえば西武多摩湖線の牧歌的な平和が、ある日にわかには掻き乱され、電車に向けてシャッターを切ろうとする者たちがホームに溢れかえって大変な熱気をはらんでいたことがあった。何十年だか使用されてきた車両が新型に切り替えられることになった、その最後のおツトめの日ということだったが、老教授の退官コウギに馳せ参じた忠実な弟子たちにも劣らぬ真情をみなぎらせてカメラを構える人々の内には、小学生もいれば中年も老人も、またいかにも年齢不詳の「おたく」っぽい人たちもいるといった具合で実に年齢構成がばらばらで、しかもその雑多さにもかわらざるごとく男ばかりであったなあと、僕はようやく、鉄道に過剰な愛情を注ぐ人々の姿を日常のひとつとして目の当たりにしたことがあったと思いついた。

「鉄ちゃん」と言うんですよ、とそのとき若きドイツ文学者が教えてくれたのである。何というきつぱりとした、即物的な呼称だろう。少しばかり間抜けでもある。正式には「鉄道ちゃん」なのか？ 線路は続くよどこまでも、の歌詞どおりに鉄路への、そして鉄路を駆けるものへの憧憬を膨らませ続けるフェチ男たちが堂々、われらは「鉄ちゃん」なりと胸を張って日々活動

にいそしんでいるという事実を、僕はうかつにも初めて知った。そして自分にはおよそ興味のもてない事柄に **b** の欲望を傾注してやまぬ人間が世間に遍在していると知ったときに感じずにはいられない、一種の神聖な戦慄をそのときも覚え、普段どおり理知的な口調を崩さずに語り続けるトーマス・マン研究者の白哲の顔を凝視したのだった。

彼こそは僕が自覚的に出会った「鉄ちゃん」第一号だった。そして第二号が赤ん坊の姿をとって自分の家にやってくるとはそのとき、想像すら及ばないことだった。

幼い男児と日々つきあっているうちに、わが日常空間にはすっかり鉄道網が張りめぐらされてしまったかのようである。なにしろ相手は起きてから寝るまで、食事でも遊びでも「でんちゃ」「じょうききかんちゃ」がなければ始まらない。少しずつたまってきた彼の蔵書の背中を見れば『JR特急・超特急100点』『JR山手線一周100点』『しゅっぱつしんこう』『きかんしゃトーマスのしっぱい』『ゴードンはどろだらけ』等々とある。熱唱するのは「線路は続くよ」「青い光の超特急」。朝起きてまず考えるのは「いのかしら線」に乗って「いのかしらこうえん」に行くこと。毎瞬、どちらを向いても列車尽くしの連続で、彼が鉄路の夢から解放されるのは「おっぱい」に吸いついているときだけではないかと思われる。

逆に言えば、親としてはこれほど子供が世話になつていゝる鉄道というものに感謝しないわけにはいかない。いや、感謝どころか、鉄道が子供にふるう影響力のジンダイ(註)さには恐れ入るばかり。

**c**

。誇張して言えばそんな調

子である。一歳にも満たぬころ、踏み切り前で遭遇した井の頭線急行列車の快走によっていわば目をぼちりと開いて以来、物言わぬ赤ちゃん時代からの脱却を彼はもっぱら電車関係に導かれることで果たしていった。「でんちゃくん」「うんてんちゃん」といった素朴な単語から出発し、一歳十カ月で特急百点を丸暗記、新幹線の五〇〇系だの七〇〇系だのを難なく見分け、井の頭線富士見ヶ丘駅における運転士、車掌の交代シーンを楽しみにし、吉祥寺駅で頭上を走り抜けた「あずさ」の華麗な姿に仰天、最近では九州新幹線「つばめ」誕生に深い感銘を受け、「栄光の列車つばめ」だの「新しい一ページをくわえていきまぢゅ」だのと、録画して繰り返し見直している特集番組のナレーションの文句をわがものとするに至っているのである。

むろん、「無文字」段階にとどまっている一歳児のこと、いくら毎日絵本やズカン(註)で研鑽けんさんをつもうとも、説明文を読めるわけ

ではない。目で見ながら、親の読み聞かせる声と合わせて図像を記憶に刻むのみである。それなのにどうして彼は「すごい」と「あやめ」と「しおさい」、あるいは「オホーック」と「すずらん」などという僕には区別のつけようもないと思える類似・同型列車を正しく名指すことができるのか。一種異様なまでの眼力、記憶力を、列車は幼児から引き出してみせる。「のぞみ」と騒ぐので何ごとかと思う、とまったく関係のない写真に「のぞみ」が豆粒大に写り込んでいたなどということがしょっちゅうだ。しかもたとえば七〇〇系なら七〇〇系を、写真で見ても絵で見ても模型で見ても、幼児は迷うことなく七〇〇系と判断できる。これまた不思議なほどの読解力なのである。新幹線に「新幹線」という以上の分類を考えてみたことのなかった父親などは到底理解の及ばない事態だ。すべては列車たちがいかに強く男児に呼びかけ、アピールしているかということだろう。その(注3)コール&レスポンスによつて息子は日々鍛えられ、鉄道との関係を通じて世界を広げていく。

大げさに言えば——しかし実際これは、大げさに騒ぎ立てたくなるくらいにダイナミックな相互関係なのだ——、幼児は(注4)「鏡像段階」のみならず「電車段階」を経ること(両者の時期はほぼ一致するというのがわが仮説)、言葉と物の緊密な連関を体験していくのである。食事どき、すっかり気を散らしている幼児の注意を惹き、その口を何とか開かせて食べ物を押し込むには、「あつ、一番線にこまち到着！」といったせりふに如くものはない。そのとき彼が開けた口は特急を迎える駅となり、同時に彼自身が「こまち」と同一化している。彼が摂取するのは言葉⇨電車なのだ。あるいはもちろん、ちゃんと食べれば「立派な運転士さん」「駅長さん」になれるよ、という説得も有効だ。そうすると幼児はぱくりと食いつき、目をくわつと見開きぶよぶよした両腕のわずかな筋肉を硬くして力こぶを作る。栄養摂取に応じることで、九十センチたらずの小さな体はたちまち栄光の身体と化す。

(野崎 敏 「赤ちゃん教育」一部改)

(注)

1 フェチ … 特定の種類の物に異常な偏愛を示すこと。

2 白皙<sup>はくせき</sup> … 皮膚の色が白いこと。

3 コール&レスポンス … 呼びかけと応答。

4 鏡像段階 … フランスの精神分析家ジャック・ラカンが定式化した、人間の子供の六〜十八か月までの人間形成時期を指す言葉。子供は鏡の中に自分と同じ姿をした像を見つけて、同一化しながら、自我の最初の輪郭を形作っていくと考えられている。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

11  
15

(ア)

11 コウギ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ 仕事のリュウギ  
④ ギジロクを公開する  
③ ギシや装具の使い方を学ぶ  
② 宇宙旅行のギジ体験  
① 言葉のユウギを楽しむ

(イ)

12 ソウダイ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ ソウシユンの山を歩く  
④ 背中にソウシヨウを受ける  
③ ショックで顔面ソウハクになる  
② ソウゼツな最期を遂げる  
① ハイソウする敵を追いかける

(ウ)

13 おツトめ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ ドリヨクが報われる  
④ ザンムを処理する  
③ 秘術をネンリキで見破る  
② 早朝のゴンギョウに参加する  
① リゴウシユウサンを繰り返し返す

(エ)

14 ジンダイ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ ジンシヨウではない食欲  
④ フウジンに祈りを捧げる  
③ コウジンの至りに存じます  
② 医はジンジュツなり  
① 震災の復興にジンリヨクする

(オ)

15 ズカン

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ 名月をカンシヨウする  
④ 古い掛軸をカンテイする  
③ カントウを飾る名文  
② 雨のカンゲキを縫って走る  
① カンカツが区に移った

問 2

空欄

**a**

に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

**16**。

① 無味乾燥

② 百花繚乱

③ 二束三文

④ 金科玉条

⑤ 晴耕雨読

問 3

空欄

**b**

に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

**17**。

① 無我

② 無給

③ 無縁

④ 無益

⑤ 無償

問 4

傍線部 A 「一種の神聖な戦慄」

とあるが、その表現を用いることで筆者が伝えようとしたことは何か。最も適当なもの

を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

**18**。

① 敵意

② 畏怖

③ 疑念

④ 失望

⑤ 軽蔑



問5 空欄

c

に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

19。

- ① このままでは子供を電車に奪われてしまうかという恐怖すら感じる
- ② 子供の教育は電車に完全に依存しているわけだが、この際、徹底的に利用してしまえ
- ③ 将来電車の運転手になりたいと言ったとしても拒否できないくらいの情熱である
- ④ 親が子供を育てているのではなく、電車が子供を育てている
- ⑤ 電車に少しずつ心を奪われている自分に気づいたときには慄然とした

問6

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

20。

- ① 筆者の子供は、大人の「鉄ちゃん」をしのぐほどの情熱を鉄道に見せており、鉄道を見に行くことだけでなく、鉄道関連の本を集めることにも積極的である。
- ② 「鉄ちゃん」とは鉄道の写真を撮る人のことを指すが、写真を撮るために平気で平和を乱す「鉄ちゃん」の存在を筆者は苦々しく思っている。
- ③ 筆者はプラモデルの鉄道が張りめぐらされている家を心のどこかで軽蔑していたが、自分の家がそうになってしまい驚いている。
- ④ 筆者の子供は大好きな鉄道を通じて言葉と物の緊密な関係性を体験している。
- ⑤ 筆者の子供は大好きな鉄道から学ぶことで文字が読めるように成長した。